

## 『ミッション・スクールと戦争』

鈴木勇一郎

## 本書の意義と位置づけ

本書は戦時下における高等教育の諸問題についてミッション・スクールである立教学院を事例として多角的に迫ろうとしたものである。

本書が扱っている戦時というのが、いったいどの時期を指すのかは実は重要な問題であるが、それを定義するだけでも長々とした議論が必要となる。ここでは深く突き詰めることにして、とりあえず日本を取り巻く国際的な緊張が高まってきた一九三〇年代から第二次世界大戦が終結した四〇年代半ばごろまでを含む時期としておおまかに捉えて考えていくことにしたい。

実は題名の一部としても使われているミッション・スクールという用語にも評者は当初違和感を抱いていた。狭義の意味でのミッション・スクールとは、外国教会の伝道事業の一環として設立運営されている学校のことを指すからである。しかし戦前における立教学院は、同志社や明治学院、青山学院などに比べると、聖公会の影響

力が強かったという点で、狭義のミッション・スクールに近い性格を持っていたということができると共に、日本におけるキリスト教学校がその実態とは関わりなく、ミッション・スクールというイメージを一般に持たれていることからすると、必ずしも不適当な題名というわけではないだろう。

本書の構成と執筆者は次の通りである。

## 〔構成〕

序章一	研究の課題と視角	前田一男
序章二	戦時下の高等教育	寺崎昌男
第一部	聖公会と立教学院首脳の動向	
第一章	戦時下外国ミッション教育の危機	
第二章	日本聖公会の教会合同問題	大江 満
第三章	学院首脳陣と構成員のアジア・太平洋戦争に対する認識と対応	大江 満
補論	元田作之進と天皇制国家	山田昭次
第二部	戦時への対応と教学政策	西原廉太
第四章	「基督教主義ニヨル教育」から「皇国ノ道ニヨル教育」へ	大島 宏
第五章	医学部設置構想と挫折	老川慶喜
第六章	教育における戦時非常措置と立教学院	
第七章	アメリカ研究所と戦争	永井 均

第三部 戦時下の学園生活

第八章 戦時動員体制と立教中学校 安達宏昭

第九章 戦時動員と立教大学における教育の変容 奈須恵子

第十章 戦時下の学生生活 前田一男

第十一章 朝鮮人留学生たちの民族的苦悩と受難 山田昭次

第十二章 立教学院関係者の出征と戦没 永井 均

豊田雅幸

終章 戦時下の立教学院 老川慶喜

本書の冒頭では、前田一男が課題と研究視角を提示するとともに、寺崎昌男がこの時期における高等教育政策について概観している。ここでもふれられているように、大学史は研究が長らく進んでこなかった分野である。

その要因としては一般の研究者が学内の史料にアクセスすることの困難性という制約に加えて、従来各学校が編纂してきた年史類に顕彰的意図が強かったということなどが、ここでは指摘されている。

一九七〇年代後半以降、こういった状況を克服し、研究的視点を重視する試みが何度もなされており、本書をはじめとしてその成果が出てきていることはまちがいないといえ、研究体制や史料公開状況など、未だ十分な状況にあるとはいえないのも実情であろう。本書はその

中で大学史、とりわけキリスト教大学史研究にとって画期的な意義を持つことはまちがいない。

立教学院では、史料集の刊行で終った『立教学院百一十五年史』の完結後、学院史資料センターを設置するなど、大学史についての継続的な調査研究を行ってきたが、本書は戦時下という状況で立教学院に起ったことに光を当てた成果である。

立教学院の一三〇年以上に及ぶ歴史の中であってこの時期に焦点を当てたのは、ミッション・スクールにとって戦時下は学校の存亡をかけた時期であり、これを把握することは大学としてのアイデンティティを自覚するという現代的な意味を持つためであるという。

この時期の歴史を考えるには、さまざまなアプローチの仕方が想定されるであろうが、本書では次の四点、つまり、

①立教首脳部の意思決定。

②戦時下における母教会との関係。

③「加害」という視点。

④学生生徒の生活実態。

という視点から、考えていくという方法をとっている。このように戦時中の問題について扱うことは非常にデリケートな側面にも目を向ける必要があるが、ここではそれに正面から向き合うことを表明している。

また、このような本格的な大学史の研究を可能にしたのが、国外を含めた学内外にわたる史料調査と整理作業であるが、本書では、それらの各史料群をまとめりとに整理して紹介していることは、後学者にとって大きな参考になることはまちがいない。

### 各章の概要

次に、各章の概要を評者が一読した限りでの感想や疑問なども交えつつ紹介していきたい。

本書は大きく分けて三つの部分から構成されている。まず第一章から三章までは聖公会と立教首脳部の動向と題して、アメリカの教会をはじめとする国際的な環境の中で、立教や日本聖公会がどのような対応をしていたのかを考察している。

第一章は、一九三一年にアメリカのキリスト教会によって相次いで出された日本のキリスト教教育と東洋伝道に関する二つの報告書を巡る立教学院の対応について検討している。

一九三〇年代における日本のキリスト教学校が、戦時体制の進行と共にアメリカとの関係を縮小させていったことはこれまでも指摘されてきた。本章では、アメリカ聖公会や宣教師の関係史料などを駆使して、その過程が単純なものではなかったということを明らかにしている。

その中では日本との関係だけではなく、中国をはじめとする東アジア諸国での伝道との関係やこの時期におけるアメリカ聖公会の海外伝道の財政上の危機を指摘するなど、当時の聖公会が日本伝道縮小の方針を打ち出した背景にもメスを入れている。

一九三〇年代以降、日本のミッション・スクールが、アメリカの母教会からの自給自立的傾向を強めていったことは以前から知られていたことであるが、その要因として筆者はアメリカ経済の悪化や満州事変後の日米関係の緊迫化の影響であろうと漠然と考えてきた。しかし、このような明確な報告書が出されていたことに驚いたというのが正直な感想である。

一方でアメリカのいくつかの教会が共同で調査に当たった二つの報告書が、聖公会やメソジストといった個別の教派の動向とどのような関係にあったのか評者にはよくわからないところがあり、今後の検討がさらに必要ではないかと感じた。また、こうした各教派共同の問題が起ってくる際に必ず背景として見え隠れするキリスト教連合大学構想との関係も見逃すことができないだろう。

第二章は、日本基督教団への合同問題をめぐる日本聖公会の対応を扱っている。そこでは教会合同が戦時体制下における強制によってだけではなく、外国教会からの自立を悲願としてきた日本のキリスト教関係者の自律的

な動きが交錯する形で進行していったことを明らかにしている。外国からやってきたキリスト教がどのような組織形態をとるかということは、戦時下の日本だけではなく普遍的な問題を孕んでいるように思う。

なお日本基督教団への合同に対する聖公会の抵抗にも触れられているが、それに際してはどのような論理を展開していたか具体的に明らかにされていたほうが、聖公会の動向に疎い評者にとってはありがたかった。

また先にも触れたキリスト教連合大学構想などの場合が典型的な事例ともいえようが、プロテスタント教会においては、常に組織の拡散と統合のせめぎ合いが、大きなファクターとなっていたということをあらためて痛感した。

第三章では、戦時下の立教大学の首脳陣及び教員たちの戦争に対する認識や対応を紹介している。実は戦争という状況において、個人がどのような姿勢を持つのかについては、非常に難しい問題を孕んでいるところがあり、単純に戦争に反対や賛成であっただけで割り切れるものではないと少なくとも評者は考えている。しかし、この章を読んだ率直な感想を言うならば時局や学生に対して当時の立教の教員たちに対してもう少し責任感があってもよかったのではないかとの印象を受けた。

補論では立教大学の初代学長であった元田作之進の天

皇や朝鮮、神社や国家に対する見方を分析し、彼がそれから国家支配体制に対して積極的に迎合していたとしている。補論としたのは、元田の活動したのが、主に一九一〇年代であったことによるものであるように思われるが、この時期の言説と戦時期の一連の動きがどのような関係性をもつのかについては、やはり今後慎重な検討が必要にも感じる。

続く第二部では、戦時期において立教学院が学校としてどのように対応していたのかを描いている。

第四章では、戦時中に行われた財団法人立教学院寄附行為からのキリスト教主義排除と教育目的への「皇国ノ道」採用を含む変更にある過程を他のキリスト教大学の動向を交えて検討している。ここではキリスト教色払拭を求める文部省からの圧力があつたことはまちがいないものの、それに従わなかった学校もあるなかで、立教が教育目的に「皇国ノ道」という文言まで入れたのは、「学生暴行事件」など、当時の学校内部の事情が大きく作用していたことを明らかにしている。

戦時中にキリスト教学校にさまざまな圧力が加えられたことはまちがいない。その過程で寄附行為を変更した学校も少なかつたが、それでも立教の寄附行為変更は数あるキリスト教学校の中でもとりわけ振幅が激しかった事例といえることができる。これは戦時中における立教

学院を考える上で、中心的な課題であることはまちがいないだろう。

第五章は、聖路加国際病院を合併する形で進行していた立教大学医学部設置計画が、厚生省の反対によって挫折していく過程を描いている。そこでは、同じように戦時体制への協力を標榜しつつも立教学院とは異なった厚生省の構想があったことを明らかにしている。

つづく第六章では、戦時非常措置にともなう文学部の閉鎖と理科専門学校の開設の過程を他大学の動向とも比較する形で取り上げている。これらは学徒出陣によって文系学生が学校から実質的になくなってしまうという事態への対応であるが、ここでは同時に財政問題としての側面も強調している。

戦時中には、それまで文系だけの部局を有していた法律系やキリスト教系の各大学などが、理系の部局を増設していった。これらは、徴兵猶予の停止による文系学生の激減など、緊迫化する時局への対応であったことは間違いないが、その中でも医学部設置問題のように新たな教育構想を踏まえた積極的な意味合いを持つ場合と理科専門学校のように学生の確保という現実の課題への対応という場合など、さまざまな事情が存在したということがわかる。

とはいえ、立教に限らずこの時期に多くの文系の学校

が理系の部局を作ったということは、戦後これらの学校が総合大学化をしていく過程で大きな意味を持った可能性があり、今後更に検討されていくべき問題の一つであろう。

第七章は、一九三九年に聖公会の援助によって開設されたアメリカ研究所の戦時中の活動を明らかにしている。実は評者はこの章を読むまでアメリカ研究所はその設立時期から、当初から当時の時局に対応してきたものというイメージを抱いていたが、実際にはアメリカ聖公会の主導によってできたものが、戦時中を通してその性格を大きく変えていったことを知ることができた。

最後の第三部では、戦時下立教の学生生活を扱っている。

第八章では、日中戦争以後、立教中学校がどのように戦時体制に対応していったのかを明らかにしている。ここでは一部の教員と配属将校らの動きがキリスト教色の払拭に影響があったということを指摘している。

第九章では、戦時下においては学生の大陸への派遣などの形で陸軍への後方支援が行われると共に、それらの課外活動が次第に学生の評価の対象となり、大学自体の授業のあり方も大きく変わっていく姿を、学内に残る事務文書や総長の日記などを駆使して明らかにしている。

第一〇章では、文部省及び立教大学が行った学生調査

をもとに、戦時下における立教大学生の生活を学生全体と個別の問題の比較の中で分析している。その中では、立教大生が経済的に比較的恵まれた階層にあったことを指摘すると共に、戦時体制下においても意外なほどさまざまな娯楽を享受していたことを明らかにしているが、次第に戦時の影響をうけていったことにも同時に触れている。

第一章では一九二〇年代から戦時下にかけての朝鮮人学生の諸相を掘り起こしている。とりわけ日中戦争後に強化された皇民化政策の中で朝鮮人学生に対する監視の徹底を打ち出した文部省の方針の下で、さまざまな形で翻弄され、抵抗していった学生たちの姿を明らかにしている。また、一般的には良心的とされていた日本人キリスト者たちの朝鮮人との意識のずれも指摘している。

これら三つの章は、いずれも戦時中の立教大学の学生の生活の実態を明らかにしている。彼らの生活実態というのは、史料状況の関係などから正直言って評者にはイメージしにくいところがあったが、ここではさまざまな史料を駆使したことによって、かなり具体的につかむことができた。ただそれと同時にそれぞれの時期や局面によってかなり大きな違いがあったようにも見受けられた。最後の第二章では、立教大学から出征した学生たちの数を、統計的に明らかにしている。また日中戦争中学

内で開催されていた戦没者の慰霊祭が、国策協力を促進する役割を果たすとともに、一九四三年以降は神道式で行われるようになったことなどを指摘している。もちろんこれ自体は本書の中でもとりあげられてきた寄附行為の変更を考えると当然のことであったともいえるが、ここでは変更を促進する大きな要因となった「学生暴行事件」とその背景にあった教職員間の対立の構造を明らかにしている。

### 全体的な意義と今後の課題

以上本書の内容について概観してきた。まず感じさせられたのが、これまでの研究を進めることができたのは、学内だけでなく海外を含めた史料の発掘と整理の進展によるものであったということを感じた。戦時中というのは史料が残りにくいことが多く、研究を進める上では困難なことが少なくないが、特に本書の場合「遠山日誌」のような当事者の基本史料が残されていたことが研究を進める上でかなり大きかったのではないかと感じた。

次に少し内容上のことに踏み込みたい。本書の基本的なテーマからすると、当時の時局とキリスト教学校との関係という問題は避けて通ることはできないだろう。寄附行為の問題でも見られたように、戦時中の立教大学はさまざまなキリスト教学校の中でもかなり極端な振れ方

をした学校という印象を持たざるを得ないが、その要因についてはかなり本書の中で明らかにされている。しかしこうした問題は立教学院だけにとどまる問題であったわけではない。

この時期には、立教に限らずキリスト教学校にさまざまな圧迫があったことは事実であろう。しかしその際しばしば言及される「軍の意向」とは具体的にはどのようなものであったのだろうか。このあたりについては、実は本書でもあまり明らかとなっていないように感じた。

各学校に圧力がかったという場合、時期的にも内容的にもかなりのばらつきがあり、そのあたり軍や文部省の意思というものがどこでどのように形成されていたのか具体的に検討する必要があるように思う。もちろん史料的な制約などによりわからないことも数多く存在するが、こういった問題については現場の配属将校らの力が大きかったのか、それとも陸軍省などの中央部なのか、中央部だとすれば具体的にはどのセクションがこの問題にあたっていたのか、などを具体的に検討していくことが必要なのではないかと思う。また、軍部と文部省が一枚岩であったと想定するのも非現実的であり、この両者との関係性の中でどのようなことが行われたのか考える必要があるのではないかと評者は考えている。

またキリスト教学校に対するさまざまな圧力は、例え

ば立教では「学生暴行事件」であったように、学内で起ったいくつかの事件が、それが顕在化するおきなきっかけとなっていた場合が少なくない。これらは戦時中の特殊要因がもたらしたものであったことはまちがいないだろう。

しかし同時にこれらがそれ以前からその学校に構造的に蓄積してきた問題の表出であった可能性がなかったのかどうか、単に戦時下にこのようなことが起ったということと終らせていいのかということを考えていく必要があるのではないかと思う。

というのは、こうした問題に触れると評者が携わってきた青山学院で戦時中に起きた一連の事件との比較がどうしても想起されてしまうからである。寺崎昌男も本書二七頁で少し触れているが、青山学院でも一九四三年に廃校を取りざたされるほどの非常に大きな危機を迎えた。これは国家主義に傾いた当時の院長に対して、一部の自由主義的な教員たちが反抗し、院長が彼らを学校から追放したために、学生たちが騒擾を起し、陸軍による介入を招いた、と語られてきた。

しかし、近年これは長年にわたり学校の運営などをめぐって対立してきた教職員間の抗争が大きく影響していたことが明らかとなってきた。その対立が本質的に何であったのかは、現在のところまだわかっていない部分

少なくないが、遅くとも一九三〇年代に入るところには顕在化してきたのではないかと評者は今のところ考えている。

青山学院においては、明治時代以来アメリカメソジストミッションと日本人のキリスト者たちとの間で、どのような学校にすべきかということについて相当な緊張があったようだが、アメリカからの援助が少なくなってきた三〇年代には、日本人による自主的な運営への志向が強まると同時に、日本人たちの間の対立構造が目立ってきたのである。このように青山学院において一九四三年に生じた一連の出来事は戦時という状況が事態をより先鋭化させたという面があるにしても、基本的にはそれ以前からの学校の運営をめぐる構造的な問題の反映であった可能性が高い。

また、この一九四三年における一連の事件は、戦時中

だけでなく戦後にも長らく影響が及んだ。この時に追放された教員の一人が大木金次郎という人物であった。彼は戦後青山学院において学長、院長、理事長、さらには私大連の会長など、青山学院および教育界に大きな影響力を行使した人物となっていたが、その際には戦時中に軍部に抵抗した自由主義者という語りが彼の力の源泉のひとつとなっていたのである。

このように戦時中の問題は青山学院においてもそれ以前からの構造と以後への影響が交錯する極めて重要な時期であったということができる。その分析に際して戦時下という特殊な事情を考慮していくことは当然であるが、実はその前後の時期との関係から立体的かつ構造的に把握していく必要があると本書を通じてあらためて痛感した。